民國佛教期刊文獻集成

編

任繼愈 主

京師圖書館藏

B94
223
:23

民國佛教期刊文獻集成補編

任繼愈題

第23卷

南瀛佛教

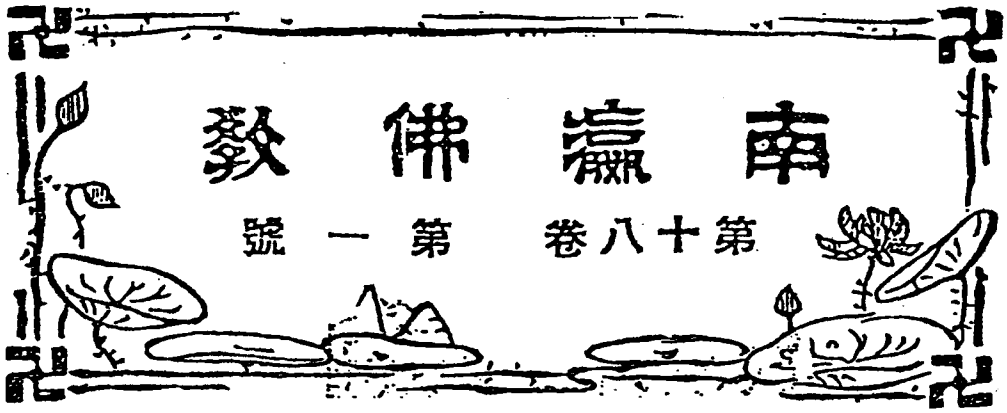
中國書店

南瀛佛教

新年號

臺灣總督府文教局社會課

南瀛佛教會發行



文殊菩薩、佛に問ひ奉りて言く、世尊心地とはいかなるものなりや、諸の衆生の爲に演說して未だ苦しみを離れざるものを離れしめ、未だ菩提心を發さざるものを發しめ、未だ菩提を證せざるものを證せしめ給へ、佛文殊に告げ給はく、文殊よ、汝は眞に母なり、初めて菩提心を發せるものを導かんが爲に發を問へり、我諸の衆生の爲に說かん、善男子等よ、心地は十方の如來の最も勝れたる法となす所なり、一切の凡夫の頓悟するの法なり、法樂を受くる寶宮なり、有情を饒益する寶藏なり、諸佛の功德を生ずる本源なり、一切の衆生の惡業を銷し、生死の險難を度し、苦海の波浪を息め、老病死の海を竭くし、生死の長き夜を照す大智の炬なり、諸佛の無上の法なり、最も勝れたる慧なり、猶大聖國王の如し、三界は心を以て主となす、能く心を觀ずるものは究竟涅槃を得、觀ずる能はざれば沈淪す、心は猶大地の五穀を生ずるが如く、菩薩及び佛位を生ず、故に三界は唯心のみなり、故に心を地と名づく、善き友に親近みて心地の法を聞き、理の如く觀じ法の如く修行して、阿耨多羅三藐三菩提を得べきなり。〔心地觀經〕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新年法話

後藤道鑑

本日は新年初頭の法話でありますから、何か目出度いお話しをと思つて、色々考へて見ましたが、一體佛教信者、就中禪宗の信者といふものは、キリスト教や其他の宗教信者とは遙つた、一つのしつかりした悟りといものか出來て居なければならぬので、只佛教の信者だ、俺は禪宗寺の壇家だなどゝ云つても、その人の心の中に、何等の安心立命ができてゐないのみか、禪宗とは如何なる宗旨か、禪とはどういふ事かチツトモ心得へて居ないで、先祖からの儒勢でたゞ何といふわけもなしに、禪宗寺の檀家に席を置くといふのであつたなら、それは眞の佛教信者とは申せないのみならず、折角心の穩を與へてくれる立派な宗旨の恩澤に浴すこともできぬわけであります。どうか皆さんは是れから、この新年を機會として、精々自分は佛教信者なり、自分の遠い先祖は皆佛教の厚き信者であつた。禪宗寺の有難い教えに安心立命を得て居たのだ。だから自分も先祖の宗旨を承け繼いで之を信じ、自分も安心立命を得て先祖に對する孝養を思ひ、轉ては又是を子孫にも傳へて、我が家のお佛壇、――先祖の安息所としてのお佛壇をけがさぬやうに守護して行くことを教えなければならぬのであります。今日の世の中は吾々の遠い先祖の時代とは遙つて大層複雜になり生活にも困難になつて參りました。從つて精神上の安心も昔とは遙つて容易に得られなくなつたことは事實であります。でありますから、吾々は先祖の信仰せられたよりも、もつと〳〵熱心な信仰を持たないと、現代の社會の荒波を乘りきることは困難であります。で本日は承陽大師が支那から御傳になつた佛法則ち禪に就て大略をお話し申上げ信仰の手引を御取次致しませう。

一體釋尊の教といふものは、これを種々に分類すること

が出來るのであります。則ち釋尊が三十歳にしてお悟りになられてから、八十歳にお入滅なされるまでの五十年間には、實に五千餘卷の經文をお說きになつて居られるので、その中には恰度應病與藥と云つて醫者が病に應じて藥を與へるやうに、一切衆生の智識や根機や修養の程度に依つて、それ〳〵適當したやうにお敎え下さつた、それが今日小乘だ大乘だ密敎だ、顯敎だといふやうに分れた所以であります。然らば今吾々の信じてゐる禪宗は、何れの部類に屬すべきかといふことになりますが、一體大乘とは字の如くに大きい乘り物の儀でありまして、自分一人でなく一切衆生を悉く乘せて悟らせるといふ意であり、小乘とは小さな乘り物ですから自分一人救はれゝばよいといふのであります。日本に存する宗旨で申すならば、小乘敎といふものは宗旨としては傳つておりません。たゞ學問として倶舍宗とか成實宗とかいふものが奈良にありました。それから密敎といふのは弘法大師の傳へた眞言宗であつて、その他の天台宗、日蓮宗、淨土宗等は皆顯敎であるのであります。又其の顯敎と申す中にも、聖道門と淨土門とに分けることができます。聖道門といふのは、天台宗とか日蓮宗とか或は禪宗もその中へ入れることができるのであつて、自分の力を以つて修養して悟を開く所謂自力宗であり淨土門とは淨土宗や眞宗等の念佛であつて自分の力を以つては悟を開く譯にいかぬために、如來の本願を賴み阿彌陀如來の名號を力として悟らせて貰ふ、即ち他力宗であります。ところが只今自力宗の中へ禪宗を加へましたが、も一つ別な分け方を致しますと、聖道門淨土門も、即ち自力宗も他力宗も引きくるめて、禪宗を除いた諸宗を敎家と申しまして、こゝに禪家と他宗との判然した區分を致します。即ち言ひ換へれば、釋尊の說かれた敎えが十三宗五十何派と分れましたが、之を煎じつめると、敎家と禪家との二つに區分することができるのであります。更に言ひ換へれば、敎と禪との二字に歸著致すのであります。然らば何故に禪は佛敎の諸宗を向に回して、たゞ一人で取り組むのであるか——かういふ疑問が當然與らねばならぬことゝ思ひます。それにお答え致しますならば、一體釋尊の敎が、前申しましたやうに、何故大乘小乘だ、密敎だ顯敎だ、聖道門だ淨土門だといふ風にお說きになつたかといへば、是れ一つの手段方便でありまして、結局の目的とするところは禪にあつたの

であります。ですから何れの宗旨でも結著に往つては皆禪とならなければならぬのであります。それゆゑに、禪といふものが單なる一つの宗旨となるべきものではなく、禪宗寺の坊さんが、禪は俺達の專賣特許だなどゝ思つて居るならば、それは大なる間違いであります。從つてその讀家信徒の人達に於ても、實はそれだけの合點がなくてはならないわけであります。それで若し他の諸宗が、まだ禪にならぬのならば、その宗旨はまだ行くところまで行つてゐない、途中にぶら〳〵してゐるのだと申すより仕方ないのです。つまりどの宗旨でもその堂奥は禪といふところまで行かなければならぬのであります。

しかるに此の禪宗といふ特別の宗旨があるのはどうしたわけであるか。世間の人も皆禪宗といひ、自分等もそうだと思つて居る此の禪宗に就ては、如何なる道理が含まれてゐるのであるかと言ふ疑念が當然起るのでありますが、實は此の禪宗といふ名前は餘所から附けたものであつて、固からあつた名ではありません。則ち承陽大師は禪宗といふことをどこにも申して居りません。否はつきりと「禪宗といつてはならぬ。曹洞宗といふことをいつてはならぬ。我が傳へたる所のものは單なる禪宗ではない。我が傳へ來れるものは曹洞宗といふそんなものではない、然らば何であるか?それは佛道である」と斯う正法眼藏の中に明らかに仰せられてあります。けれ共それでは、俺は八助でも田吾作でもない正眞正銘の人間だといふと同一の理論となつて、人間だが何とか區別して符牒をつけて呼ばないと、話ができぬ勘定になるので、已むを得ずして自ら禪宗といふ場合もあり、或は曹洞宗といふ場合もあるけれ共、本來はそんな一宗一派といふ小さな型に嵌まつた宗旨ではないのが我が曹洞、——否承陽大師の教儀であります。こゝまで申しあげておいて、さて禪と云ふ言葉について、普通世間で稱へてゐる一通りの意味を申しあげます。禪とは印度語の禪那のことでありまして、これを支那流に譯しますと、靜慮とか正思惟とか云ふことになるのであります。吾々お互ひの心といふものは、御承知の如く亂れ勝ちで統一することの至つて六ケ敷いものであります。卽ち正しい事のみを思ひ、邪のことは思はぬといふのでしたら都合がよろしいが、何でも思ふ。否邪曲の方面は餘計に思ふものであります。それを正しく心を働かせるのが所謂禪那であり正思

惟であります。若し禪といふ意味がさういふことであるならば、豈一宗一派に限つた筈はなく、何れの宗旨でも禪那でなければならず、豈佛教のみに限た筈にあらずして、すべての人は皆禪那でなければならぬといふことに相成るのであります。則ち禪那に宗旨のできるものではないでせう。承陽大師が我が宗を禪宗などゝいふてはならぬと言はれたのは則ち此の點からであります。昔て大内青巒居士は、禪宗と人も呼ぶやうになり、自分でもそれを許して默許してゐる今日の場合、禪の說明は禪那正思惟よりも一歩進んだ說明を下して居られましたがそれは斯うであります。禪那といふことは總ての力の頂點に達した時現れてくるのが禪であるといふのであります。そうなると勿論佛教の修業の上ばかりでなく、苟も吾々は事に當つては、誠心誠意、自己の全力を注いで行ふべきでおつて、そこには決して餘念が加つてはならない。飯を食ふにも雪穩に行くにも忘我の境まで行かねば、そのことになりきつたといふことはできません。飯を食ひながら米相場が上つたとか下つたとか考へて居たのでは、折角の御飯も味も香も判る筈はありません。胃の腑といふものはたゞ機械的に胃液を分泌するのではなく、氣分の持ちやうに依つて異うものであります。うまいと思つて喰べると胃液分泌が多くなつて一層消化を助けるものであるし、まづいと思つて喰べると胃液はその分泌量が極めて尠ないといふことは、醫學上の定說であります。同じ道理で不氣嫌の時と滿悅の時とは胃液の分泌量が異ひますから、同一食物を採つても、營養の攝取される上に差異が生じてくるわけであります。西洋人は雪隱——雪隱などゝ洒落れた云ひ方はしませんが、便所ですなア便所へ行つて、用を便す間ぼんやりして居らずに、便所の中に棚が設備してあつて、そこには本が載せてあります。それで用の濟む間はその本を開いて讀んでおります。私の關係してゐた學校には、まう七十の年を越したお婆さんですが、それでもまだお孃さんで——西洋人は結婚しなければ、何時まで經つてもお孃さんと云ひます。此の頃では日本でも、歐米人の眞似をして年を取つてもまだ未婚の人を老の字を加へて老孃と云つてをります。その老孃はアメリカ人でありますが、自分の專用の便所にはチャント本棚があつて、そこには四五冊の本が容れてあります。こんなお話しを申しあげますと、西洋人は隨分きたない、クソ

もミソも一緒にしてゐるなどゝお考へになられるかも存じませんが、西洋人の便所は日本の便所とは違つて、非常に綺麗でありまして勿論下の方は見えませんし、臭氣など絶對に致しませんから、蠅なども居りません。濟んだあとは栓一つ動かせば水道の水が洗滌してしまひますから寔に綺麗なものであります。次手に申しますが歐米人は手などを洗ひません。又日本流に憚つて居るのでは足が疲れるといふこともありますが、腰を懸けて便すやうになつてゐますから、面白い本でしたら何時まで居たつて別に苦痛を感ずることはありません。便所で本を讀むのなどは如何にも實用主義のアメリカ人らしいと思はずには居れません。それでは用を便すことになりきつたとは申されぬでせう。尤も日本でも二宮金次郎は、少年時代山から歸り途上に本を讀んだといふことですが、勉强に熱心な金次郎には、さうでもするより讀書の時間を與へられなかつたのであるから、之れには大いに同情すべき點があるのであります。

此の一つのことになりきる。忘我の至境に達する、こゝまで往つたならば、言詮不及意路不到で、口で言ふことも心で思ふことも出來ない。或は言語同斷といつてもよろしい、まうこゝまでくれば物を云ふ道が絶えてしまうのであります。心行行滅ですなア。此所のところが所謂禪の極致であります。

西洋に於ては思想の發展を三段に分類して居ります。それは正反合と申して、所謂辨證法といはれて居るものであります。例へばこゝに或る甲といふ思想があるとすると必ずそれには反對の乙なる思想が唱えられる。そうして又遂には甲と乙との思想を二で割つて得た、最も妥當性を帶びた丙なる思想が生れるのであります。かくして又時代を經れば丙に反對する思想が現れ、總て亦兩者を折中した新思想が現れるといふ風に、常に思想發展の經路は正・反・合の三段階に依つて進歩するものであるといふのであります。が今禪についていへば、三の三段階のまう一歩上段にあるのが卽ち禪であります。百尺竿頭進一歩などゝ申すのは、つまり此の境地を指して云つたものであります。デカルトといふドイツの哲學者は「我思ふ故に我あり」と叫んだことによつて、西洋哲學史上に一異彩をなして居りますが、これは勿論唯心的な考へ方で、何物も客觀の存在は認めないが、思ふ我れのあることだけは事實であるといふやうな意

味でありまして、思ふことそれ自身を肯定してゐるのでありますが、禪に至つては、その思ひを破却して物我不二の精神狀態に到達せんとするのであります。即ち西洋流の學問よりは常に一枚上を行つております。かくの如く禪の思想は、實に東洋獨特の思想でありまして、大乘佛敎の極致であります。此の點より考へて見ますると、西洋の思想が權利と義務といふ風に常に相對的のものであることも思ひ半ばに過すことができるのであります。東洋思想特に我が國の君臣父子の觀念に至つては、其の間何等の思慮をさしはさむの餘地なく、楠公の後醍醐帝に於ける、相模太郎の國難に於ける等忠君も愛國も全く一つであつたなどは、之れ所謂禪と名くべき境地であります。

彼の甲斐慧林寺の快仙國師が、信長の兵燹に罹つた際、安心必不須山水、心頭滅却火亦涼の一句を殘して山門樓上に從容として死についた如きは、即ち伽藍と我と一如の當體であります。人生派の歌人として有名な石川啄木は、天才的な藝術家でありましたが、惜しいかな不遇のうちに一生を終つてしまひました。彼啄木が常に現實の世界にあつて、血みどろな生活の道を歩んだことは、彼の殘した歌を一讀すれば何人も直ちにうなずかれるところですが、その啄木が晩年に於て、缺陷に滿ちた現實の醜惡なる社會をそのままに肯定して、缺陷も罪惡も混然となつてゐるところに、眞に生命ある社會を認めてゐたなどは、これ社會と彼自身の生命とが一つになつたからであります。啄木は文士詩人に通有な胸の病で、早くも二十七歳を以つて、明治四十五年の暮れゆく春と共に、此の世を去つたのでありますが、しかも彼は天才歌人であつたゞけに、現實の世界をあるがまゝに觀たが如きは、禪的境地を得てゐたものと私は思ふのであります。又彼の華嚴の瀧で生命を破壞した藤村操が、人生の不可解なるを以つて遂に巖頭の辭を殘して此の世を去つたが、彼は――「不可解の恨を抱いて、煩悶終に死を決す。すでに巖頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし。始めて知る大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを」といふて居るのは、死に臨んで死生が一如となつた。今まで生の世界と死の世界とを別々に考へて居たために不可解であつたが、死生が一如となつて見れば、胸中何等の不安あるなしで是れ則ち禪であると云つて差支へありません。惜しいかなホレーショの哲學などに固りすぎて煩悶を增す

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のみであつたが、も少し早く死生一如を悟ることができればよかつたが、矢張りその境まで行かなければ悟ることができぬのが凡人だと云ふより仕方がありますまい。明治の始めに横濱に居た遊女――チョット名前が出て來ませんが、その遊女がアメリカ人に言ひ依られてすでに操を破られんとした刹那、「露をだにいとう大和のおみなへし降るアメリカに袖は濡らさじ」の三十一文字を殘し、舌を嚙み切つて死んだ如きは、日本の名譽と自分とが一つになつた爲めに、一命を犧牲にして日本婦人の威氣を示すことができたのです。是立派な禪の境地ではありませんか。

われとものとが一致して言葉の極まるところ、思慮を絶し分別を飛び越えたところ、そこが我が禪宗の本分とするところであります。それは敎えて習得し得るものでもない。學問で承知できるものでもない。であるから敎外別傳と云ひ、不立文字と云ふのであります。釋尊は一日澤山のお弟子方を連れて歩いて居られた。すると突然或る所の地上を指して、此處にお寺を建てるがよいと仰しやつた。すると帝釋天といふ者が出て來て、一本の草をそこえ植えつけて、さアお寺が建たりましたといつた。釋尊はそれを御覽になつて莞爾と御笑ひになつたといふことです。それから又或る時、釋尊はお弟子達の爲めにお說法をなさらうとして、說敎臺にお上りになつた。いつもであつたならば、御言葉を以つて色々と御說法になる筈であるが、その日は講座にお上りになつたきりで何も仰せられません。お上りになつたと思ふと、文殊菩薩が傍から出て來て、槌を打ち鳴らして皆の注意を集め「諦觀法王法王法如是」と唱えた。釋尊はそれなり講座を下りてしまはれた。卽ち口で云ふことは枝葉の話である。その極點に行くと言葉は無くなつてしまひ、心を以つて心に傳へるより仕方がありません。又我々が朝な夕な、寢るも起きるも悉く佛法でなければならぬといふことが茲に現れて來て居るのであります。釋尊が講座へお上りになつた時だけがお說敎ではない。一擧手一投足皆お說法であります。又佛殿だけが佛敎のあるところではなく法のある所皆お寺であります。けれ共始めからそれでは判らないから、具體的に小乘だとか大乘だとか顯敎だとか、密敎だとか、五十年の間御說法になられたのでありますが、それは結局茲の悟りの妙處に至らしむる手段手續きにすぎなかつたのであります。釋尊は最後に又講座に

お上になつて、金波羅華といふ花を手につまんで、一同に御見せになつた。そこには八萬人ほどの聽聞者が居たが、誰一人として釋尊の花を拈じられた意味の判る者はなかつた。すると上座にゐた迦葉尊者といふ人が、お釋迦樣のお顏を見てニツコと笑つた。そこでお釋迦樣は、「我に正法眼藏涅槃妙心實相無相の法門あり摩訶迦葉に附屬す」と言はれたが、此の一事に依つて此の迦葉尊者はお釋迦樣の家督相續人となつたのです。これが禪宗の宗旨の一番初めであります。以心傳心宗とは此の邊から出た言葉です。別に文字となつてゐる黄卷赤軸によつて傳へたのではない。よく六韜三略虎の卷などいふ秘密文書があつて、それを傳へてもらうなとゝいふことを劍術の方などでは申しますが、我が禪に限つては何等形に現れたもので傳ふへき一物もないのであります。しかしかう申しましても禪宗に於ては決して文字を輕蔑したのではなく、あらゆる學問をしつくしてその極點まで行つてほんとうの心の眼が開き、すべてがあるがまゝに見える所が卽ち禪であるのであります。迦葉尊者はあらゆる學問が濟んでその極點に達し、釋尊が拈じられた金波羅華の花の意味が判つたので、そこに以心傳心が行はれたのです。しかし學問をしつくしてその極點に達すといひましたが、悟りの道は學問ばかりから入るとはきまつてゐません。むしろ學問はおろか目に一丁字なくとも、禪の極地を會得することも出來れば堂奧に達することも不可能ではありません。釋迦牟尼佛以心傳心の佛法は漸次傳つて第二十八代目が彼の有名な達磨大師であります。此のお方は元來が印度の產ですが、釋尊傳來の佛法を支那に傳へたいものと、わざ〳〵難澁な旅行を續けて入支せられました。その折梁の國王の武帝との問答はあまりに有名でありますからこゝには略します。で慧可といふ弟子を得て自分は支那の第一祖となられました。それから二祖が此の慧可で、慧可に就てもお話しすることがありますが、今はそれも略して、それから三祖四祖五祖と行つて此の五祖弘忍といふ人の相續人となつた慧能といふ人は晩年僧といつて、年取つてから出家せられた人で、しかも學問などはあまりなく、水車小屋で米搗きをしてゐた人ですが、しかし悟りに入つてゐましたから釋尊傳來の佛法を相續して支那に於ける第六代目の人となつたのであります。そうして見ると、何も禪宗の悟りといふものは、學問がなければできぬ

といふものではありません。要するに學問修業は、悟りに入る手段でありますから、心が出來て居れば、一足飛びに途中の小さな驛を通過して特急で目的地へ達する汽車のやうに一超直入如來地といふこともあるのです。六と云はれた乞食がありましたが、かうした非人に似ず明朗な心を持つて居りました。或る時六の身上に同情をした人が、自分の家へ連れ歸り面倒を見てやらうと申しますと、六はそれを頭から拒絶して詠んだ詩が冬は暖かなり草莚の裡、夏は涼し橋下の流れ、人若し六の意を問はゞ、明月水中に浮ぶといふのであります。住むに家なく喰ふに食なき乞食非人の中にさへも、かうした立派な悟りを胸中に藏してゐる者もあります。これ禪の悟道が必ずしも學問を必要としない證據であります。此の如く釋尊から一器の水を一器にうつすが如く傳つた佛法の極意たる禪を、入宋によつて我が國へ傳へられたのが曹洞宗の承陽大師樣であります。我々は今かゝる有り難い宗旨の信者として眞の佛法、佛法中佛法たる禪の妙體を、日々の生活の上に會得して、お寺でなければ佛法がない譯ではない、言葉がなければ御法話は聞けないといふ間違つた考へを捨て、鍬持つ手にも算盤はぢく指先にも、乃至起きるにも寢るにも、箸の上げ下ろしから著る上にも常に佛教精神殊に禪的悟道を生活の中心として行きたいものであります。近時西洋思想に代るへまものは東洋精神でなければならぬといふ事が識者間に唱えられて居ますが、その東洋精神とは何か？　儒教でもない、道教でもない。それは實に大乘佛教の思想精神であります。よく申すことですが、我が國の文明は（物質的）すべてが西洋文明の模倣でないものはありません。汽車汽船を考へて見ても電車自動車を考へて見ても、其他、電信電話ラヂオ飛行機等、あらゆる文明の利器が一として模倣でないものはありません。その中で我が國の發明品といへるものは人力車と尺八と自動車の泥よけだそうですが、人力車は自動車が歴倒的に流行して來た爲めに、今や街頭から影をひそめんとしてゐます。尺八はなるほどいゝ音が出ますが、しかしヒアノ、オルガン、ヴアイオリンなどが樂壇の寵兒となつてゐるのには及びません。自動車の泥除けに至つては醜體の限りであります。しからば我が國には發明發見上に何等の功献をするものなく、この點に於ては先進國、文明國の名に恥ぢ入る次第であります。けれども我々には之れ

に酬ゆべき何物もないであらうか？　否々あらゆる物質文明の恩惠を蒙つた報償として、我等の提供すべきものは則ち大乘佛教の精神であります。彼に物質文明の餘澤を享けたといふならば、此には精神文化の粹たる、禪の思想を以つて應ずる道がある。これこそは日本の專賣特許として世界に冠たる唯一無上のものであります。我々にして若しも之に目を注ぐならば、決して氣おくれする必要はない、大いにほこりとして全世界に向つて宣傳して可なりであります。西洋諸國人の思想精神をリードして居る宗教は言ふまでもなくキリスト教であります。しかし過ぐる歐洲大戰は、彼等自身が築きあげたる自然科學の力を應用して悽慘悲激見るものゝ目を掩はしめて、人類史上にぬぐうべからざる一大汚點を殘しました。これ實に天を仰いで唾する如きものでありまして、自分等の發明した機械文明に依つて自らの生命を失つたのであります。キリスト教は愛を說いてゐる宗教であります。しかるにその信者たる國民が世界史上に記錄を殘すやうな大戰爭をやつて無數の人命を絕つたといふことは、それ等の國の宗教たるキリスト教が、如何に權威なき骨董的宗教となり終うせてゐるかを物語るに充分であります我が國も明治以來に及んでも戰爭を行ひましたが、その開戰の動機は全く歐洲大戰のそれと異つてゐるのであります。卽ち小なる慈悲を捨て大なる慈悲心を採つたのであります。支那及びロシアを打ち懲らすことによつて、より大なる佛陀の慈悲心を實現したのであります。五分の蟲を殺して一寸の蟲を助けたといふのと同じであります。これ實に我が國民の上に心の指導者となつた大乘佛教の敎え、もつと極めれば禪的思想精神に蒙るところ大であつたからであります。私共はかゝる世界に類例なき偉き宗教の精神を持つてゐる國民と生れたのでありますから、勞働爭議だ小作問題だと、喧嘩にまで西洋人のヘドカスをなめずと、むしろ獨創的な精神文化の發現地たる國民にふさはしき態度を以つて、逆に世界に向けて呼びかけ、我が大乘佛教の精神、禪の思想を鼓吹し、佛陀に歸れ、東洋に歸れの標語を以つて勇ましく進みたいと思ふものであります。

興亞の聖業と日本佛教

無哲道人

○「長期建設」と聖戰

今更ら贅言を要すまでもなく、應しく現下は世界を擧げて非常の時である。殊に我が國は、有史以來の非常時、又は「超非常時」とさへ叫ばれてゐる。今事變勃發以來吾等は、東洋永遠の平和、興亞建設と云ふ實に重大な使命のもとに文字通り擧國一致して絶大な努力を之に集注してゐる。是の故にこそ世も人も現事變を「聖戰」と呼んでゐる。眞に「聖戰」である。我が聖化の慈悲行は彼の地の全面に及び支那大衆の安住な生活が然も遺憾なく次々に建設されて行つて居る。まことに聖なることの極みである。佛敎の所謂、「大乘菩薩の願行」とは正しく之れである。

然しながら、此の聖化が普く行屆き且つ永久に完持されることとは、さて言ふが如く容易い業ではない。そこに、「長期建設」が叫ばれ、これを覺悟せることは當然であり、絶對必要のことである。即ち「長期建設」とは建設を長期に亘らせるとの謂意ではなく、此の大聖業は、さう容易く完成されるものではない、のみならず斯うした聖業はさらにあるべきものでないから此の際充全なる聖化を期さねばならぬ、而して我が肇國以來の大和の理想を此の機會にこそ中外に宣揚せなければならない。それには是非共「長期建設」を覺悟して以つて進まねばならぬといふのである。尤も聖なる業作建設が短期が短期を以つて完成されて搖ぎないものであるなら、何を構へて長期を續持する必要はないことであるが、言ふ迄でもなく充全なる聖化は、所詮、長期に俟たざるを得ないのである。そこに一億一心以つて聖業完遂への長期も覺悟された譯である。この一億一心以つて聖業完遂への長期覺悟は、同時に聖業のより短期完遂を期す

ることになるのである。まばらな長期覺悟でなく、一丸（一億一心）となつた覺悟は偉大たものである。吾等の日常一切の行念が、この聖業完成に集注され一貫されて居る以上は、より良く、より早く期成されることは言ふまでもなからう。

されば吾々は、日本國民として將た佛教國民として、唯追隨的な思惟行持であつてはならない、よく戰場の勇士を憶念して佛教の說す「不惜身命」の信行精進こそ大切である。

○支那文化の認識

現下の吾等の行念日常の一切は今聖戰の目的完遂に存依してゐるのであるが、特に日本佛教徒としてのより更らに念持し行履すべきは、先つ以つて、少くとも支那の文化を認識し、（聊か遲蹇の感はあるが、凡そ普く完き聖化は寧ろ向後にあり、尙相當の長期を必要とすることであるから）日支兩民族の精神的相通點を親知すると共に之が携行に努めつくすべきであると思ふ。我が國人の支那文化に對する研究は、今に限らぬ何時の時代にあつてもその重要性を有するのであるが、就中、最も重要にして切實な時機は何と言つても現在がその絕頂であり、更らに向後に及んで多々益々肝要必須のことであると思はれる。

我が日本が夙に千數百年の昔、大陸の文化として大いに採入れその啓發を享けた彼の隋唐の支那文化はどうであつたか、恐らく世界文化史上の秀であり異彩であつたことである。爾來我が國は學者と謂はず一般人にしても皆一樣に彼の文化を研究しその價値を中外に發揚して居るのである。然るに彼は自國の偉大な文化を正視せず、爲めに遺憾ながら外來思想に影響せられて、立派な儒教の道義や、聖なる佛教の理想を顧みざるのみか之に背反する樣なことにさへ立ち至つたもののやうである、眞に惜みても猶餘りあることである。然し、彼等とても熟々顧ひ惟へばその精神の奥底には必ずや何千年來のれつきとした自國の文化思想の傳流してゐることを自覺するであらふ。これは見遁かせないことだと思ふ。そこに吾等は一段と早く彼れの自覺を促すべく努力して一日も早く彼等を迷暗から悟明へと慈導することに心構へる必要がある。そうすることによつてより速に彼等は、日支兩國の緊密相通相依の要が判り、その如

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com